



2020年脱スマホ依存

昨年ふと目にした驚愕のニュース映画上映中にスマホいじりする若者、「2時間は耐えられない」(マネーポスト WEB2019/11 配信)は SNS で拡散され人びとを議論の渦に巻き込んでいました。記事には映画館で上映中にスマホを触ってしまう学生の声が男女一人ずつ紹介されており、それだけで「若者」全般としてくるのは横暴と思うけれど、その意見には唖然。「スマホを見つ映画の内容を理解することもできる。家ではテレビと同時にスマホで Twitter、iPad で雑誌と使い分けしている感じがちょうどいい」とかなんとか、なんだかマルチタスクな自分に酔ってる! 彼らはそれでいいのかもしれないけれど、映画館は暗闇を保つためにもスマホの使用をしないよう上映前に呼び掛けているので、光を煩わしく思う周囲には由々しき問題です。



映画のワンシーンを見せずにわかるとしてしまっても「そこで何が映っていたか見ていないのに本当に?」と問い詰めてみたいけれど、一方でテレビと一緒に Twitter は理解できるのです。CM 中に番組の感想をみてしまうことはありますし、同じところで楽しんでいる人がいると相乗効果でもっと面白くなります。番組の内容がトレンド入りすることは人気のバロメーターとされ、『天空の城ラピュタ』の放送に合わせて滅びの呪文と一緒に呟いてサーバーをダウンさせて話題になったのもうひとつ昔前。その頃くらいから SNS で常に誰かと繋がりがながら成長した今の若者にとつて、スマホは本当に切り離せないものかもしれません。

はたまた映画館でも近年、「応援上映」という新しい映画上映が生まれています。これまでの常識を覆す、ペンライトなどの光りものも音が鳴るものもアリのみんなで大騒ぎしながら映画を観るというスタイル。盛り上がったレポなどを読むと非常に面白そうなのですが、個人的には居合わせる人のセンスに非常に左右される分、楽しめるかどうかは運次第だと体験して思いました。いくら OK だとしても映画の登場人物へのツッコミを上映中に叫ぶのは勇気がいると思う

のですが、笑えないツッコミが場を切り裂き、叫んだ本人は満更でもなかったのかツッコミを続け気まぐらなっていく空間…。あの気まぐらさを思い出すと、いつそのことハツコタグ応援上映の方が面白いかもしれません。スマホ光らせて OK な上映回にそれ用のタグ付きでツイートすればそこで観ている人々は同時に反応を共有できるわけで、静かさは保たれたままわいわいがやがやと楽しめ、もしかしたら新しい仲間との出会いの場になるのでは? …と、今どきのナイスな解決法に思えたけれど光景を想像して受け入れられない自分がいます。暗闇の中であけ屋敷よろしく下からライトを受けて光る顔が並んだ映画館。下を向いてはコヤコヤ文字だけが大きく盛り上がり。なんだか虚しいですよね。そもそも映画館はみんなが笑ったり泣いたり驚いたりできるのが楽しいところなので、やっぱりそれぞれが「映画に集中できる空間」であることがいちばんなのだと思います。



スマホ中毒な人にも自分の行動が人の迷惑であることをしっかりと自覚して、映画の世界にどっぷりハマる楽しみを知ってもらうには? もしスマホを見ないで2時間過ごせないと自覚しているのなら、まず2時間小説を読むことをお勧めしたいです。小説は自分で読まない限り最後までとり着けません。集中力が続かないのであれば、漫画で試してみると絵の力が助けてくれるでしょう。でもやっぱり小説となると、絵も音も感覚もない世界に自分の力で飛び込むことで浮かび上がってくる景色があり、そこで初めて体験できる感動があります。そして集中力を得たその後に映画を見れば、原作でも小説とは全く違うことに気づくでしょう。どちらがいい悪いではなく映画と小説は別物なので、監督が切り取った画、俳優が表情で伝える感情、アニメーションの動き、美しい音楽や静寂、色光から受ける温度、そこかしこに映画にしかない表現で創り上げた世界があります。物語だけ追って見せずにわかるといつ目をそらす前に、その10秒に込められたこだわりを見つけたら! くらい気持ちで見た方が100倍楽しい時間ですよ。(図書館文化委員)

今から読んでも映画館で楽しめる! 2020年公開予定原作小説

さくら 西加奈子著 楠元1階 913.6/220 … 発表から15年の不朽の名作。比喻が彩る豊かな感情表現と長い時の経過を写し取った家族の物語だけにどう再構築されるのでしょうか。監督待望の映画化ということと北村匠海×小松菜奈×吉沢亮×犬の魅力に期待します。

82年生まれ、キムジヨン チョ・ナムジュ著 楠元1階 929/Ch … 異例のバスターと化した韓国のフェミニズム小説。昨年韓国で公開され、日本公開は未定ですが話題となったので早ければ今年中に公開されるでしょう。カルテの記述という手法でひとりの女性の一生を淡々と描きつつも、登場する男性には名前がないという痛烈さもある今作。ミソジニーからの激しい反発など社会から注目を受ける中のような映画となったのでしょうか。